

NP-PAKism エヌピーパッキズム

2010/10月号

vol.13

環境や資源の保護に優れた容器「紙パック」を提供する「日本紙パック株式会社」が、リサイクルのさらなる推進を願って発行する環境情報誌です。

環になる 人を結ぶ 1

平井成子さん

全国牛乳パックの再利用を考える連絡会(全国パック連)代表

不可能を可能に 紙パックリサイクル

山梨県大月市の母親サークル「たんぼぼ」のリーダー平井初美さんが、日本で初めて紙パックの回収に取り組みはじめた1984(昭和59)年当時、紙パックはリサイクルできない紙(禁忌品)とされていました。「行動しよう」という初美さんの情熱が、中身を飲み終わったらゴミになるしかなかった紙パックの回収システムを確立させ、リサイクル運動を全国規模にまで展開させたのです。

他の飲料容器のリサイクルにはない、独自の回収の歴史をもつ紙パックのリサイクル運動。初美さんが発足させた「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会」の現代表で、初美さんのご長女である平井成子さんに、全国パック連と紙パックリサイクルの道のりや現在の活動について伺います。

環になる
人を結ぶ

1

全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 代表

平井成子さん

いきいきとした

風がふくとき

連絡会が設立してから
すでに四半世紀が過ぎた。
可能性を信じながら
新たな活動はつづく。



母・初美さんと。大学卒業後、養護学校で2年勤務したのち、全国パック連の事務局で母とともに歩む。

「洗って、開いて、乾かして。こんな面倒臭いことが定着するわけがないと、誰もが思っていました。でも母は、このひと手間で紙パックが資源になるならと、回収のルールを徹底すると再生紙メーカーを説得し、回収業者と連携しながら回収ルートを確立させていきました。母の強い信念とエネルギーが、紙パックリサイクルを社会的に位置づけたと言えます。」

昭和五十九年当時、ポリエチレンでコーティングされた紙パックは、集めてはいけないうもの(禁忌品)とされ、上質なパルプが使われているにもかかわらず廃棄処分されていました。

「母は台風のような人。社会に役立つために何ができるかと日々考え、思い立ったら即行動という感じでした。当然、家族である私たちはそれに巻き込まれますよね。でも、間違ったことをしているわけではない。行動することで、いろいろな人と交流し視野を広げていきたい、そしてそのなかで自分自

身もまた成長していきたいという思いが母にはあったと思います。」

全国牛乳パックの再利用を考える連絡会(全国パック連)の代表平井成子ひらいせいこさんは、紙パックリサイクルの創始者である母、初美はつみさんについてそう語ります。平井さんは、学生時代から初美さんと活動をともにしてきました。

地域での子育てを考えようと、初美さんが組織した母親たちの学習グループ「たんぼぼ」によって紙パックのリサイクル運動はスタートしました。情報が全くないことから、横のつながりをもとうと、初美さんはその翌年全国パック連を発足させます。

回収の仕組みづくりから

紙パックをリサイクルはしていても、回収を始め、その仕組みを確立したのが、行政でも民間企業でもない市民の手によるものであったということを知る





平成22年、韓国での資源循環政策フォーラムに出席。全国パック連と、韓国のソウル牛乳協同組合との10年近くにわたる交流を経て実現したものだ。李満宰 韓国紙パック資源循環協会会長を囲んで。



全国パック連発足から20年目、平成18年度の環境保全功勞者として表彰される。小池百合子元環境大臣と。



平成13年、フィリピンにて。地元高校生に紙パックによる手すきはがき作りを指導。「リサイクル」への理解により体験となる。

人は、多くはないかもしれませんが。前例がないだけに、さまざまな難問が湧いてきました。活動当初は回収業者の採算に見合う量(2トトラック1台分)を確保することも困難でした。

紙パック以外の古紙と抱き合わせにすることで古紙市場へと送り出すなか、建物の一室をストックヤードとして無償提供したいとの申し出がありました。回収作業や積み込みなど古紙市場に流れるまでの作業はボランティアが行う、この形で運動が広がっていききました。メディアにも紹介され、さまざまな市民運動の団体が共鳴し、地域のスパーなどに店頭回収を働きかけると同時に「洗って、開いて、乾かして」の回収ルールの指導も行いました。試行錯誤を繰り返して、多くの力に支えられながら回収の仕組みは作られていきます。

また、運動を継続していくための経済的な問題にも直面します。市民運動といっても、社会と関わる以上、経済性を伴う活動をしていく必要があります。紙パックに関連する企業の環境部門と交流したり、業界団体と連携したりすることで、企業の立場や役割を理解することができたことも、運動が継続していくひとつの鍵となりました。

「企業と市民が互いに歩みより、一緒に課題に取り組んだことで、より充実した啓発活動をしていくことが可能となりました。さまざまな困難はありましたが、関わる人たちが、皆とてもいきいきとしました。人が何か強い意志をもって動くとき、そこにはいきいきとした風が吹くんですね。それがどんなふうねりになって、ものすごい力になり何かをなし遂げるんだなって実感しています。」

発足から七年目、病に倒れ帰らぬ人となった初美さんの後を引き継ぎ代表となつてから十七年。母とともに活動した長さの倍となる時間が過ぎました。現在全国パック連の活動は、回収に関する情報提供、全国牛乳容器環境協議会との出前授業や講習会などと幅広く、また国内だけにとどまらず、韓国紙パック資源循環協会との交流も進んでいます。各種刊行物の印刷やリサイクル製品の販売などでは、福祉作業所と連携をとり、障がい者の社会活動への支援を行っています。

考えることで一歩先の未来へ

出前授業に参加している子どもたちを見ていても、すでに紙パックリサイクルが定着したということとは十分に感じとれると平井さんは言います。しかしながら、定着したということでは終わらない、終わらせてはならないという言葉には力がこもります。

「紙パックをリサイクルすることは当たり前なことになってきています。でも、リサイクルすることで、どんないいことがあるのか答えられない子どもも多いのです。リサイクルするだけではなく、その意味を考えてほしい。牛乳パックをレンズに社会をみてほしいのです。一歩先を考えると、またその先へと視野が広がっていく。世界が広がることで子どもたちは成長し、相手を思う心も育まれていくと思うのです。」

人としてどう生きるのか、人と人との関わりとはどういうものなのか、紙パックリサイクルは多くのことを語りかけています。

全国パック連との連携

(全国牛乳パックの再利用を考える連絡会)

全国パック連と当社との関係の始まりは、平井初美前代表の頃に遡ります。平成元年頃から十條製紙(株)ピュアパック事業本部(現日本紙パック(株))との連携が始まりました。

平成7年に施行された容リ法(容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律)では、お客様や当社など容器包装製造・利用事業者の使用済み容器包装の再商品化義務が課せられました。紙パックはすでに回収の仕組みが整備されていることから、再商品化義務の対象にはなりません。全国パック連の活動なしには実現できなかった大きな事例です。

これまで当社は、全国パック連主催の20回におよぶ「牛乳パックの再利用を考える全国大会」や、その後、新たにスタートした「環の縁結びフォーラム」にはその趣旨に賛同し、全面的に協力してきております。また、平成18年には、平井代表に当社にお越しいただき、紙パックリサイクルについてご講演いただきました。

現在でも全国パック連、全国牛乳容器環境協議会(容環協)共催による、「牛乳パックリサイクル促進地域会議」、「リサイクル講習会」や「エコプロダクツ」等の催しに積極的に参加し、社会貢献活動である「出前授業」にも注力し、紙パックリサイクルの啓発や環境教育、紙パックに関する情報交流などの活動をともにしています。今後も、全国パック連と一緒に「モノの大切さ」や「心の豊かさ」を伝える活動を大切にしていきます。

全国パック連 平井成子代表 講演会

平成18年11月7日 日本紙パック株式会社



平成18年、当社にて。平井代表に紙パックリサイクルについて講演していただく。

日本製紙グループ竹橋ビルにて。左から、(株)日本製紙グループ本社 芳賀社長、平井代表、日本紙パック(株) 府川社長。



「環の縁結びフォーラム」は市民、行政や事業者などで形成したネットワークの情報交流会で、環境省リサイクル推進室などを始めとして、さまざまな方面からの基調講演、事例報告、交流会が行われます。歴代の事業本部長、社長や活動を共にしてきた関係者と平井代表を囲む。



「出前授業」では、学校給食で身近な存在である牛乳パックを通して、リサイクルやモノの大切さを学びます。平井代表と当社取締役による講義(左)、当社社員による手すきはがき作りの様子。



赤星たみこの Milk Break

製紙工場の多い富士市に行ったとき、20年前と比べるとパルプの臭いがしないことに気がきました。これは工場から出る廃液をきれいにする技術が向上したことと、もう一つ大きな理由があります。それは、再生紙の割合が多くなったからなのだそうです。

製紙工場では木材を溶かしてパルプにするときが一番臭うのだそうです。しかし、再生紙はすでにパルプになったものを漂白して作り直すので、臭いが少ないのだとか。牛乳パックを集めて再生紙を作るのは、資源の有効活用という意味でも素晴らしいことですが、作る過程で臭いが出ないという、また違ったメリットもあるのですね!

再生紙を作るのはいろんな面でいいことがたくさん起きるのだなあと、嬉しくなりました。ホント、リサイクルは「利再来る」ですね!

■赤星たみこ:漫画家・エッセイスト。エコや家事に関する連載や著作多数。環境問題の講演会でも活躍中。



Information

NP-PAKismは、発行から13号目を迎え、リニューアルいたしました。

これまで、NP-PAKの製造工程や、LCAについてご紹介してきましたが、今号からは、「環になる 人を結ぶ」をテーマとし、紙パックに携わる人々に焦点をあてて特集してまいります。

日本紙パックのウェブサイトから環境情報誌「NP-PAKism」がダウンロードできるようになりました。



日本紙パック環境情報誌 NP-PAKism Vol.13 2010年10月発行

編集:日本紙パック株式会社 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-2-2

TEL (03)6665-5555(代表) FAX (03)3212-0605

e-mail npp-qa@nipponpaper-pak.co.jp URL <http://www.nipponpaper-pak.com>